






幼児期における 自然体験活動の展開と 効果に関する研究

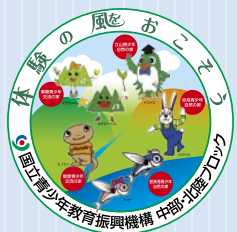
National Institution For Youth Education

令和元年度
調査研究
事業



中部・北陸ブロック次長プロジェクト

-  国立能登青少年交流の家
-  国立乗鞍青少年交流の家
-  国立妙高青少年自然の家
-  国立立山青少年自然の家
-  国立若狭湾青少年自然の家



National Institution For Youth Education
独立行政法人 国立青少年教育振興機構

幼児期における自然体験活動の意義

子供は“今この瞬間”を生きています。様々な出会いの瞬間に胸をときめかせ、ワクワクドキドキしながら環境との関わりを深めていきます。

「せんせい みてー！」その表情は得意顔です。自分が発見したことやできたことにとっても満足しています。

幼児期の発達には、それまでの体験を基にして、環境に働きかけ、様々な環境との相互作用により育まれます。そこには、人的環境として保護者や保育士、仲間が必要です。また、物的環境の一つとして、豊かな自然環境の中で、子供たちが自ら主体的に、繰り返し関わる事ができる体験活動が適しています。

自然環境は、まさに「センス・オブ・ワンダー」の世界です。見たこと、感じた事、不思議な事など、様々な発見が子供たちの諸感覚に直接働きかけます。この感覚は決して忘れることはありません。揺るがない子供たちの豊かな感性となります。豊かな感性は意欲につながります。意欲は行動に向かいます。まさに幼児期の“今この瞬間”を生きることにつながります。

本プロジェクトでは、中部・北陸地区に立地する5つの国立青少年教育施設の自然環境を生かし、幼児期における豊かな自然体験活動を様々なアプローチで実践しました。山あり海あり、川あり森あり…そこに一緒に遊ぶ仲間や、子供たちを温かいまなざしで見守る保護者や保育者、私たち施設職員の姿があります。

この報告書で紹介する活動の内容や成果が、皆様が幼児教育や自然体験活動を実施する際の一助になることを願っています。

【中部・北陸ブロック次長プロジェクトについて】

青少年教育のナショナルセンターとして、全国の青少年教育施設の教育機能向上を目的に、平成19年度より中部・北陸地区の国立青少年教育施設(5施設)が連携し、先導的な調査研究や効果的な体験プログラムを開発するとともに、成果やデータを広く普及する活動を実施しています。

幼児期における自然体験活動の展開と効果に関する研究

目次

幼児期に育みたい「3つの柱」・「10の姿」と幼小接続	3
プログラムのポイント	
国立能登青少年交流の家「幼小いっしょに！のとまり会」	5
国立乗鞍青少年交流の家「あそぼう！のりくら！ ～森のたんけん～」	9
国立妙高青少年自然の家「2019幼児キャンプ夏 ～みょうこうドキ☆ワクぼうけんたい～」	13
国立立山青少年自然の家「やんちゃキッズの大冒険 秋!!」	17
国立若狭湾青少年自然の家「海の声キャンプ」	21
事業を終えて	25
調査研究事業の概要	26

～「生きる力」につながる～

確かな学力

基礎・基本を確実に身に付け、
いかに社会が変化しようと、
自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え
主体的に判断し、行動し、
よりよく問題を解決する
資質や能力

生きる力

豊かな人間性

自らを律しつつ、他人とともに協調し、
他人を思いやる心や
感動する心などの豊かな人間性

健康・体力

たくましく生きるための
健康や体力

知識・技能

思考力・判断力・表現力等

学びに向かう力・人間性等

知識・技能の基礎

- ・ 基本的な生活習慣や生活に必要な技能の獲得
- ・ 身体感覚の育成
- ・ 様々な気づき、発見の喜び 等

遊びを通しての総合的な指導

思考力・判断力・表現力等の基礎

- ・ 試行錯誤、工夫
- ・ 他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさ
- ・ 言葉による表現、伝え合い
- ・ 自分なりの表現 等

学びに向かう力・人間性等

- ・ 思いやり ・ 自信 ・ 好奇心、探究心
- ・ 話し合い、目的の共有、協力
- ・ 色・形・音等の美しさや面白さに対する感覚 等

小学校以上

幼児教育・保育

幼児教育・保育において育みたい「資質・能力」の「3つの柱」

幼稚園教育要領等(平成29年告示)で、幼児教育において育みたい「資質・能力」の柱として3つの要素が掲げられました。

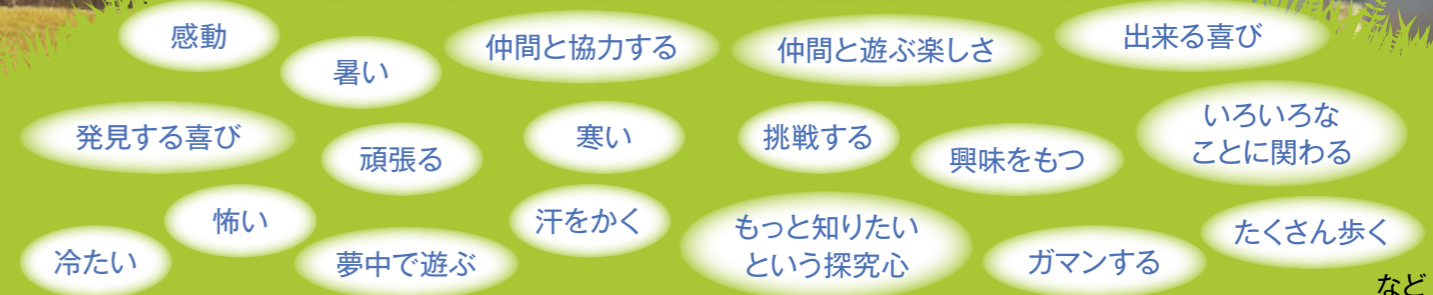
幼児期の終わりまでに育ってほしい「10の姿」

「資質・能力」を具体的に育てようとするときの注意点として表されたものが、「幼児期の終わりまでに育ってほしい「10の姿」」です。これは、幼児期に完成を目指すということではなく、子供たちが歩み出している方向を表しています。

また、小学校入学後の指導に継続させていくことが小学校の学習指導要領にも明記されており、幼児期から小学校への接続がとても大切です。



— 幼児期にこそ豊かな自然体験活動を —



幼小いっしょに！のとまり会

1 事業の概要・目的

(1) 概要

年長児と小学校1・2年生が、親元を離れ、自分の力で活動する場を提供する。これにより、一人ひとりが自分なりの体験を積み上げていく機会をもつことができる。また、体験の幅を広げるとともに、自己肯定感を高めることができる。特に、年長児にとっては、普段と違う仲間の中で過ごすことにより、頑張りや我慢する機会をもつことができる。小学校1・2年生にとっては、お兄さん、お姉さんという自覚をもたせ、「小1プロブレム」にも対応したい。

(2) 目的

異年齢集団による生活体験活動をととして、低年齢期の子供たちが体験活動の楽しさを感じるとともに、集団行動や人との関わり方のルール等に気付く。

(3) 対象

年長児 14名・小学校1年生 15名・2年生 9名 計 38名
保護者他 (第1回トークセッション 38名、第2回森のパーティ 62名)

令和元年度「幼小いっしょに！のとまり会」構想図



2 活動内容

<第1回 令和元年9月1日(日)>

9:30	10:00	12:20	13:45	16:00	
受付	はじまりの会	<子供> アイスブレイク・フードハントゲーム <保護者>トークセッション 講師 南加賀保健福祉センター 所長 沼田 直子 氏 「子育ての悩みアレコレ! ? ~大切なことってなあに~」	昼食 子供と保護者は別々に食べる	どら焼き作り 子供は保護者のために、 保護者は子供のために作る	おわりの会

<第2回 令和元年9月7日(土)~8日(日)>

1日目	13:30	14:00	16:00	18:00	19:00	20:00			
受付	はじまりの会	砂像造り	テント設営	夕食	入浴 読み聞かせ	テント泊			
2日目	6:00	7:30	7:40	8:30	9:30	11:00	12:50	13:30	14:00
起床 洗面 着替え	朝の ミッション	朝食	テント 片付け	森の洋服作り	カートンドッグ 作り	森のパーティ	おわりの 会		

3 体験活動の展開とポイント

(1) 目指す子供の姿を明確にしたねらい

3つの関わる力「自分との関わり」「他者との関わり」「社会生活との関わり」を育むうえで、プログラムを通して目指す子供の姿を具体的に示し共有した。子供たちの具体的な姿を想定しておくことで、3つのねらいをより意識することができ、さらに効果的な指導につながる。

自分との関わり (自立心)

- ①主体的に関わることを自覚する
- ②諦めずにやり遂げる
- ③達成感を味わい、自信をもって行動する

他者との関わり (協同性)

- ①仲間と思いを共有する
- ②共通の目的に向け協力する
- ③充実感をもってやり遂げる

社会生活との関わり

- ①家族を大切にしようとする気持ちをもつ
- ②身近な人と触れ合う
- ③自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもち

プログラムの中での具体的な子供の姿

場面	自分との関わり	他者との関わり	社会生活との関わり
はじまりの会、おわりの会、アイスブレイク			その場の雰囲気に合わせて静かに話を聞くことができる。
フードハントゲーム		仲間といっしょに行動することができる。	相手に応じた言葉遣いで分からないことを尋ねることができる。
どら焼き作り	自分で料理することができる。(かき混ぜる、焼く等)		用具を大切に使うことができる。
砂像造り	自分がイメージするものを作ることができる。	共同製作において、助け合ったり、教え合ったりすることができる。	
テント設営片付け	自分の役割を果たし、テントをつくることことができる。	仲間と協力して準備や片付けをすることができる。	用具を大切に使うことができる。
読み聞かせ	集中して絵本を読む(聞く)ことができる。		
朝のミッション		仲間と話し合いながら、協力して行動することができる。	
森の洋服作り		仲間と協力して自然物を集め、それを使って洋服を作ることができる。	
カートンドッグ作り	自分で料理することができる。		用具を大切に使うことができる。
ベッドメイキング		仲間といっしょに行動することができる。	用具を大切に使うことができる。
食事	好き嫌いをせずに食べることができる。		食堂利用の決まりを守って食事をすることができる。
お風呂	自分で着替えたり、体を洗ったりすることができる。		決まりを守って入浴することができる。
就寝	一人で静かに寝ることができる。		
トイレ	一人でトイレに行くことができる。		

(2) 流れを意識したプログラム

関わりが生まれる流れ・子供の思考の流れにそった活動プログラムの工夫。



相手に応じた言葉遣いで、尋ねよう
仲間といっしょに行動しよう

フードハントゲーム【次長と握手】



自分で料理しよう
用具を大切に使う
家族に食べてもらおう

どら焼き作り



協力してテント設営

自分の役割を果たし、テントを立てよう
仲間と協力して準備や片付けをしよう
用具を大切に使う



仲間と協力して自然物を集めよう



みんなで洋服を作ろう



森のパーティ

森の洋服を家族に見せよう

4 調査結果・考察

<子供の絵日記の見取り>

年長児や小学校1、2年生児が活動の振り返りを自分の文章で書くことは、難しい面がある。そこで活動を通して一番楽しかったことを、絵日記で表現することにした。小学校1、2年生児には絵の説明を簡単な文章に書く欄を設けた。

M児(小学校1年)の事例 森のパーティでの家族との関わり・役に立つ喜び

M児は、1回目の絵日記で、フードハントゲームでカードを見つけることができたこと、展望台からの景色がきれいだったことを書いている。どちらも自分自身のことだ。

2回目は、森のパーティで自分が作った洋服を母親に見せることができた喜びについて書いている。

1回目では、自分自身のことだけであったが、2回目では、他者との関わりが意識されたものになっている。1回目にも親子のプログラムはあったが、2回目になったこともあり、母親との関わり意識がより高まったのではないかと考える。



<ボランティアスタッフの見取り>

ボランティアスタッフが各回14名ほどの参加であったことから、1グループ子供5～6人に2名の班付きボランティアスタッフを配置した。中には2回連続で参加したボランティアもいた。子供との関わりが深まるとともに、子供の変容を見取るために有効であった。

<ボランティアスタッフの自由記述より>

- ・フードハントゲームで、年長児と手をつないでいた子が、小学生同士で先頭を歩いていた子に、「幼稚園のお友達もいるからゆっくり歩こう」と声かけしていた。
- ・フードハントゲームで、子供たちの方から「ちゃんと手をつなごう」と声かけしていた。
- ・朝のミッションの前に、子供たちだけで班のメンバーを並ばせている様子は、ボランティアの中で私しか見えない成長の部分だったので、忘れられない思い出になった。
- ・誰の言うことも聞かず、暴れ続けていた子が、任務を任されたとき、しっかりみんなをリードして、支えていた。

<保護者の事前事後アンケートと統計処理> —3つの力(9つの観点項目)について—

事業前(第1回事業終了時)と、事業後(第2回事業終了時)、事業終了1か月後に保護者へ家庭での様子についてのアンケートを実施した。事業前については、事業に参加する前の子供の様子について評価してもらった。のとまり会の1・2回目両方に参加し、回答があった保護者を分析対象とした。

項目は、高めたい3つの関わる力「自分との関わり」「他者との関わり」「社会生活との関わり」から、それぞれ3項目、計9項目とした。得られた調査結果を、調査時期を要因とした一要因分散分析を行った。また、調査時期の変化を詳しく分析するために、Tukeyの多重比較検定を行った。

	観点項目
自分との関わり	着替えや歯磨き、入浴など、身の回りのことで、自分でしなければならないことが分かり、自分で行う。
	いろいろな活動や遊びにおいて、少し難しいことでも自分の力でやってみようと、誰かに聞いてみたり、自分なりに工夫したりする。
他者との関わり	いろいろな活動や遊びにおいて、途中であきらめず、自分の力で最後までやりとげようとする。
	いろいろな友達と関わりながら、一緒に遊びや活動を楽しむ。
社会生活との関わり	相手にわかるように伝えたり、相手の気持ちを考えながら話したりする。
	共通の目的に向けて、みんなで話し合ったり、役割を分担したりしながら、やりとげようとする。
	家族や身の回りの人にあいさつをしたり、何かをしてもらったときに「ありがとう」と言ったりする。
	お手伝いをするなど、自分から誰かの役に立とうとする。
	園や学校の決まりを守ったり、みんなで使うものを大切にしたりする。

表1 のとまり会で高めたい3つの力の分析結果

	N	事業前 (pre)		事業直後 (mid)		事業1か月後 (post)		F (2,87)	多重比較
		M	SD	M	SD	M	SD		
総合得点	30	31.3	4.81	35.3	5.53	36.1	5.57	22.82 **	pre<mid*, pre<post*
自分との関わり	30	10.9	1.78	12	1.76	12	2.07	7.87 **	
他者との関わり	30	9.83	2.34	11.5	2.29	11.7	2.34	19.28 **	pre<mid*, pre<post*
社会生活との関わり	30	10.6	2.17	11.8	2.19	12.3	1.88	14.74 **	pre<post*

* p<.05 ** p<.01

年長児や小学校1、2年生児の pre、mid、post の得点の変化を見るため、調査時期を要因とした一要因分散分析を行った。(表1) その結果、全ての項目において有意な向上傾向がみられた (p<0.1)。さらに、多重比較を行ったところ、総合得点の pre-mid、pre-post 間、「他者との関わり」の pre-mid、pre-post 間、「社会生活との関わり」の pre-post 間において、有意な向上傾向がみられた (p<0.5)。

「他者との関わり」では、異年齢集団でのフードハントゲームやどら焼き作り、テント泊での共同作業等、他者と協力して行う経験を積み重ねたことが、その力の向上に効果的であったと考えられる。

また、「社会生活との関わり」については、家族と離れ、施設職員やボランティアスタッフ等、様々な人と関わる経験を積んだ。そして、家族のためにどら焼きやカートンドッグを作ることによって、自分が他者の役に立つという自己有用感につながった。このような経験が、「社会生活との関わり」の力の向上につながったと考えられる。さらに、通常の生活に戻り、キャンプで培った人と関わる力が、1か月後も継続し成長の効果として表れたものと考えられる。

また、事後アンケートでは、子供の変化について自由記述欄を設けた。家庭や学校生活において、以下のような変化があった。未就学児は、主に我慢してできることが増え、年齢が進むにつれ、仲間との関わり面での成長がより見られた。

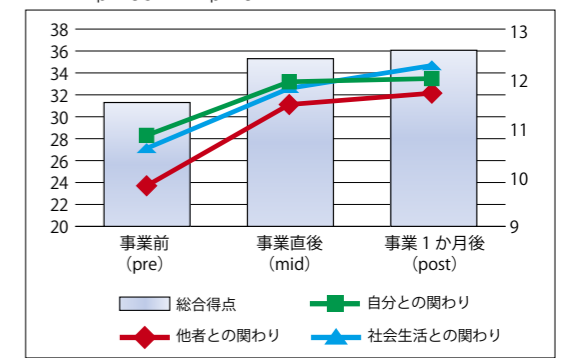


図1 のとまり会で高めたい3つの力の得点の変化

<保護者事後アンケート一部抜粋>

未就学児保護者

- ・自分のことは自分でする経験をして、「自分はできるんだ!」と自信がついたことが心の成長につながったと感じました。
- ・家での生活はTVなしの日を設けても、キレることが少なくなったように思います。我慢できる回数も増え、お姉さんの証になりました。

1・2年生児童保護者

- ・学校の友達同士でトラブルがありましたが、しっかり自分の想いを伝えられて、その後も仲良く遊ぶことができました。
- ・家での行動が「自分から」「自分でする」というところが増え、のとまり会後からとても成長を感じています。自分発信が増えました。

5 成果・課題

(1) 成果

- ・目指す子供の姿を明確にし、子供・スタッフ・ボランティアスタッフが子供たちに身につけさせたい力を共有したことで、活動プログラムが充実し成長の変容の跡が多く見られた。
- ・年長児、小学生、男女が混合する5～6名でグループ構成したことにより、年長児が小学生の言うことをよく聞き、ルールを守って活動することで、社会生活と関わる力の成長の変容がより見られた。
- ・子供の思考の流れを意識したプログラムを工夫することで、関わりが生まれる流れを意識でき、自信をもって行動できたり、あきらめずやり遂げたりすることができた。

(2) 課題

- ・全体としては関わる力は高まり、成長の変容が見られたが、小学校2年生の成長の変容がさらに見られるよう、プログラムや関わり方の工夫をする必要がある。
- ・1回目は日帰りのため、活動時間に余裕がなかった。ある程度時間に余裕のあるプログラムにすることが大切である。
- ・絵のみで、子供の成長の変容を読み取るのは困難である。観察などを交えて多面的に見ていくことが必要である。

あそぼう！のりくら！ ～森のたんけん～

1 事業の概要・目的

(1) 概要

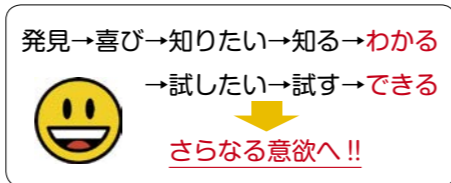
親子遠足や森体験を中心にのりくらの大自然を思い切り楽しむことができる。「こどもの森」と称して今年度7つのアクティビティー遊具を開発・設置した。森の中にコンパクトなアクティビティー遊具を設置することで子供が自ら興味のある遊びを選び、次々と遊びに熱中することができる。また、保護者や保育士も「こどもの森」の空間で一緒に遊んだり見守ったりしながら子供の楽しむ様子を観ることができる。

①ハンモック 木陰の中でゆらゆら揺られ	②ロープわたり 不安定なロープの上を歩く	③丸太わたり 丸太から落ちないように渡る	④ブランコ 木枝を使って空中ブランコ
⑤ターザンロープ ロープに捕まりターザン	⑥一本橋 丸太の上を落ちないように歩く	⑦クモの巣 クモの巣に捕まらないで抜ける	

【こどもの森】あそび！×身体機能×体力UP
 あそび！×自然環境×心の開放
 あそび！×仲間×挑戦×協力×創造

(2) 目的

- ◎自然物を活用し、多様な遊びを創出する。
- ◎多様な自然環境の中で、豊かな感性を育む。
- ◎自然の中で、様々な事象に直接触れ、たくさん体を動かして遊ぶ。



(3) 対象

【国府保育園】園児：48名 保育士：6名 保護者：56名
 【宮 保育園】園児：27名 保育士：4名 保護者：27名
 【山王・城山・岡本保育園】園児：56名 保育士：9名

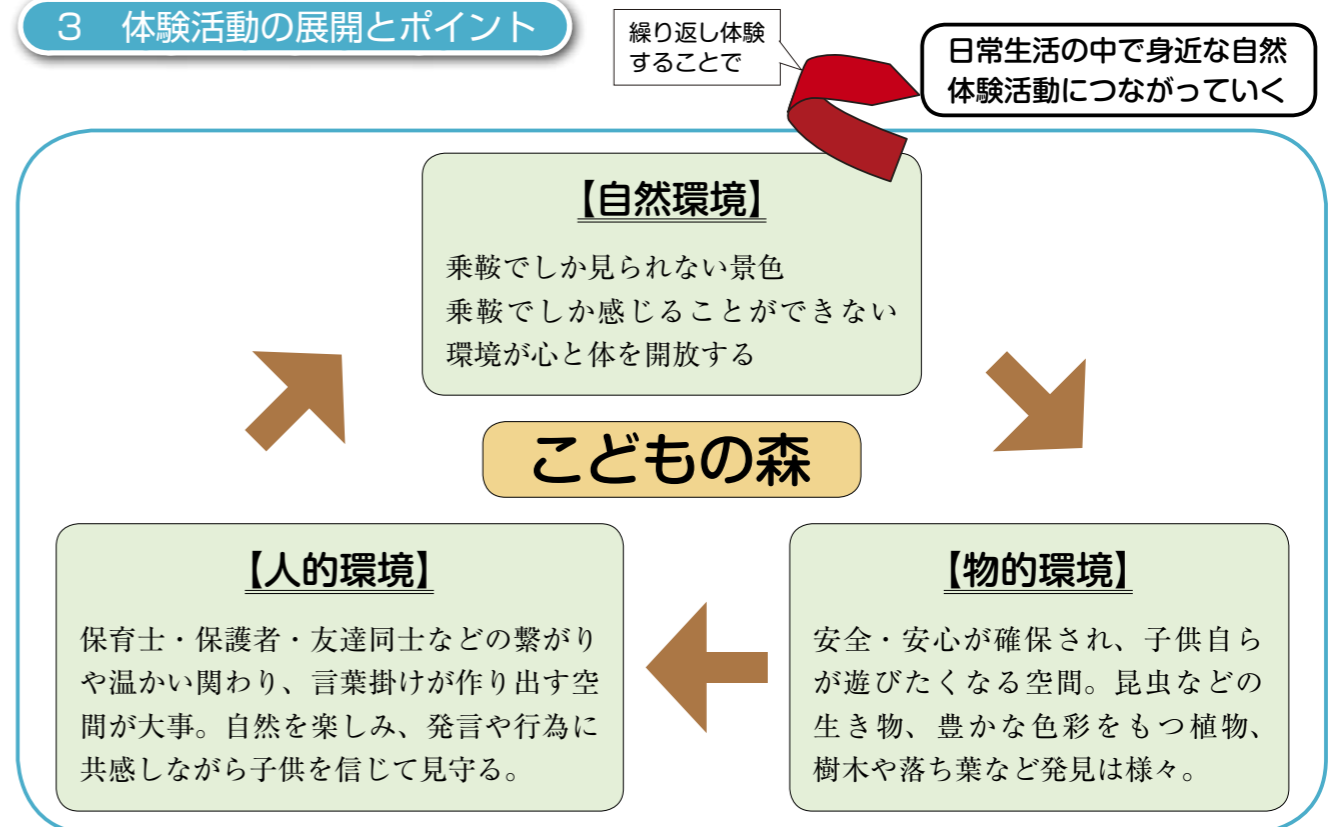
2 活動内容

【令和元年10月7日：国府保育園（親子遠足）プログラム例】

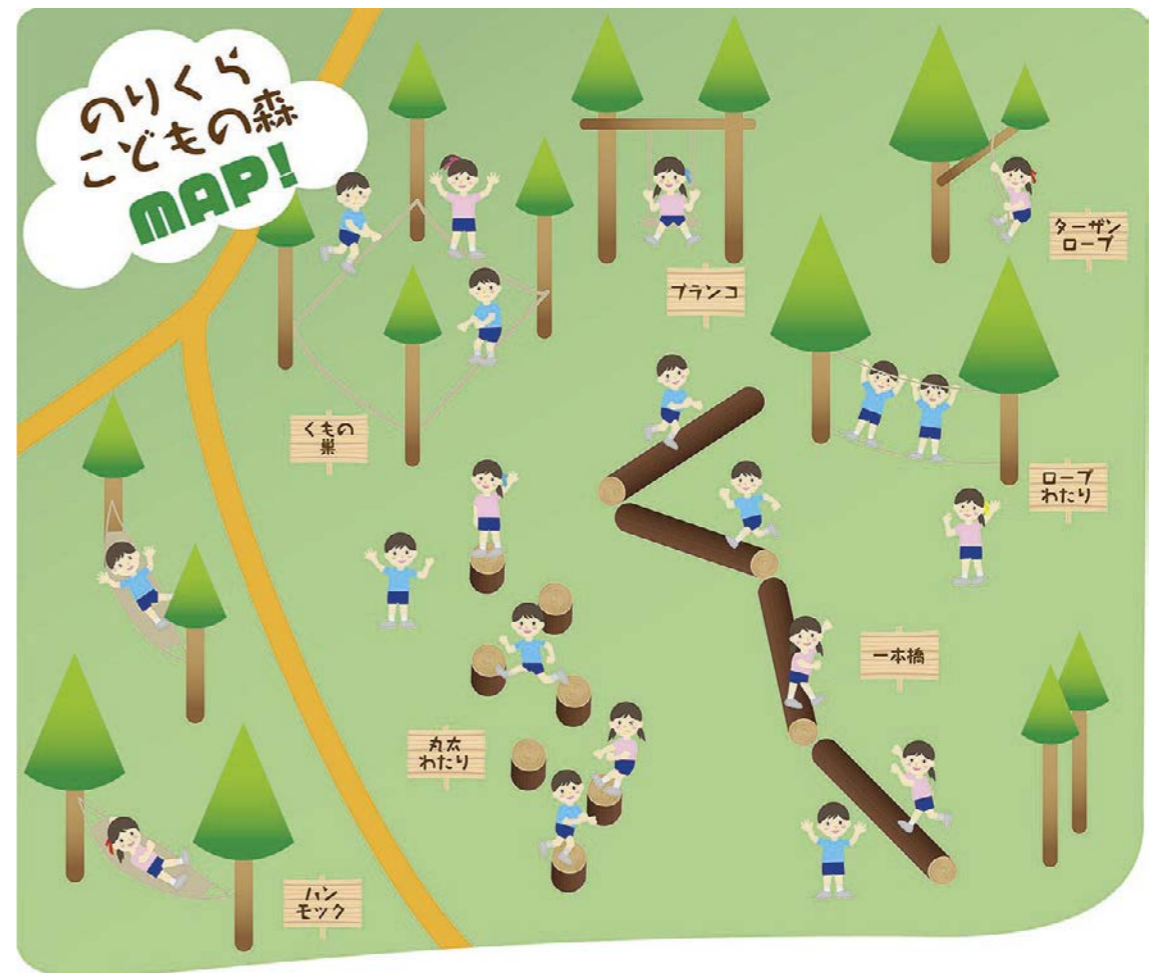
	9:30	9:45	11:45	12:00	13:00	14:30	14:40
園児	交流の家に到着	キャンプ場へ移動 ①こどもの森 ②乗鞍探検コース	振り返り	昼食	キャンプ場へ移動 ③モンタージュ ④カモフラージュ	振り返り	交流の家出発
保育士 保護者	アイスブレイク	見守り支援 家族で遊ぶ又は見守り支援			見守り支援 家族で遊ぶ又は見守り支援		

- *①こどもの森…キャンプ場にあるアクティビティー遊具を使って遊ぶ。
 - *②乗鞍探検コース…森の中を親子で歩き、ビンゴカードに書いてある課題や自然物を見つける。
 - *③モンタージュ…落ち葉や枝など自然物を使って両親や保育士の顔を作って表現する。
 - *④カモフラージュ…自然物の中に周囲の風景に溶けこむように人工物を隠しそれを見つける。
- *②～③は各保育園独自に行うことができる。

3 体験活動の展開とポイント



【こどもの森マップ *しらかば営火場】



4 調査結果・考察

(1) 遊び場の設定

新設した「こどもの森」には、7つの遊具を設定した。それぞれの遊びから心理的・身体的特徴がみられた。

ハンモック



仲間との共同行為や仲間意識が強く表れる

ロープわたり



身体の強い動きや四肢を巧みに使う技術が必要

ターザンロープ



地面から離れる不安と挑戦する気持ちが混在

くもの巣



一人では難しく、他者の力が必要で意識が高まる

ブランコ



浮遊感や身体の連動した操作性が必要

一本橋



集中力としなやかな肢体コントロールが必要

丸太わたり



高低差や瞬時の判断力、足を踏み出す勇気と不安

(2) 遊び場の目的設定と子供たちに身に付けてほしい力

設定の目的は5つあり、遊びを通して子供たちに身に付けてほしい力を想定している（朱書下線部）

- ①豊かな自然環境を活かす → 豊かな感性や自分の興味関心に即して遊べる
- ②子供たちが直接扱うことのできるもの → 諸感覚を通して直接触れる
- ③繰り返し扱うことのできるもの → 創意工夫をしながら失敗や成功を味わい夢中になれる
- ④操作性があるもの → 画一的な動きにとらわれることなく、多様な動きが創出
- ⑤仲間（複数）で楽しく遊べるもの → 仲間を意識すること、仲間と協力することなど

上記の、子供たちに身に付けてほしい力は、様々な遊びの中で表出していた。

約1時間、子供たちは「こどもの森」で遊ぶ。初めは、森の環境や7つの遊具の様子を見ながら慎重に行動している。徐々に興味ある遊具に「自分のできることで」関わり始める。

そこで、仲間の力が良い影響を与える。「こうすればいいよ」「できるよ」「こっちおもしろいよ」など遊びこめる子供たちの発言や姿に、子供たちが相互に影響を受け、遊びが深まっていく。出来て嬉しい子供、出来なくて何回も挑戦する子供などさまざまである。一人ひとりが、夢中に遊んでいる。

その中で重要なのは“自分の好きな（興味関心のある）遊び”ということである。自分で選び、関わり、考え・工夫して遊びを深めていく。揺るがない自分が存在している。「こどもの森」は、このような過程を十二分に発揮できる場であると考えられる。

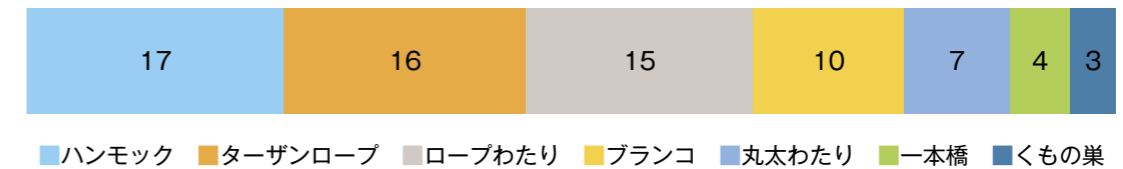
5 成果・課題

(1) 成果

① 7つの遊具の優位性について（子供たちにとって楽しい遊具）

親子活動後、保護者からご自身の子供に「一番楽しかった遊び」について聞いてもらった。

子供の一番楽しい遊び（保護者聞き取り） N=72



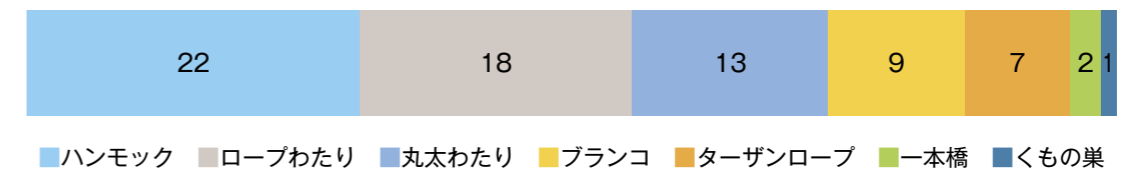
ハンモックが一番人気であった。仲間と共に横たわり、一緒に揺らす、包まれるなど、楽しさ以上に仲間と一緒にの行為がとても心地よかったと思われる。また、保護者に揺らしてもらいスリル感も十分に味わうことができた。暖かい日差しのもと森の中で、横たわる感覚は非日常なことでもある。

保育士に何うと、園にはハンモックが設置されていない。ハンモックは、改めて仲間と特別の空間を作ることに影響を与えている。遊具設定のヒントになるであろう。

② 7つの遊具の優位性について（保護者から見た遊び）

一方で、保護者から見て、子供が一番夢中になっていた遊びを選んでもらった。

保護者から見た、子供が一番夢中になっている遊び N=72



保護者も同様で、ハンモックが一番夢中になっていると感じている。子供がハンモックに横たわり保護者がそれを押し下ったり引いたり身近で操作する場面が多かったことも要因と思われる。喜び歓声を上げる子供が目に見えるのだから当然かもしれない。また、第2位のロープわたりは、一人が乗ると次から次へと子供たちが列をなしてロープに群がってくる。体が傾いたり揺れたり複雑な動きを仲間と共に楽しめることが良いのであろう。

自然環境下での遊具について一つの見解を得ることができた。子供が夢中になる遊びは、仲間と一緒に群れて遊ぶこと。力加減で揺れたりする可動域があること。固定遊具のように遊びが限定されるものではなく、子供たちが創意工夫をしながら遊びを発展させ変化していく環境設定が必要であると感じた。

③ 保育士が感じた、普段の園庭での遊びとの違い（活動後3園より22名の保育士にインタビュー）

- ・自然の中で遊ぶ子供たちの、発想力の豊かさに改めて気づかされた。（19名/22名）
- ・自然の中の遊具で、どう遊ぶかを自分たちで工夫する姿が見られた。（18/22名）
- ・何よりも自然の中は開放的で、園庭より元気に歓声を上げながらよく走っていた。（15/22名）

(2) 課題

- ・今年度は「こどもの森」1年目であり、交流の家の職員による指導や助言を全面的に行った。今後は、園独自で実施できるように運営のポイントや安全面の情報提供など積極的に行っていく。
- ・園や子供たちの実情に合わせた環境設定ができるよう、保育士や子供たちの声を反映する必要がある。

2019幼児キャンプ夏 ~みょうこうドキ☆ワクぼうけんたい~

1 事業の概要・目的

(1) 概要

国立妙高青少年自然の家では、夏と冬の年2回、幼児期の自然体験活動の機会として、幼児キャンプを2泊3日の日程で実施している。妙高市教育委員会と協力し、園指導主事1名、保育士4名がスタッフとして参加している。学生ボランティアと共に、グループリーダー（隊長）として、幼児の自然体験活動をサポートしながら、幼児の思いを第一とした関わりをお願いしている。幼児と共に自然体験活動をすることで、保育士の自然体験活動における指導研修の場としても位置付けている。

(2) 目的

「平成29年3月告示幼稚園教育要領」において、幼稚園教育において育みたい資質・能力と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が新たに示された。本事業は、その中でも幼児の「自立心」「協同性」の成長を目的として活動を構成・展開していく。

(3) 対象

4・5歳児の幼児16名（4歳児4名、5歳児12名）

2 活動内容

〈令和元年8月16日(金)〉

	17:00	17:15	17:30	20:00	20:45
一日目	受付	開会式	夕食・入浴	なかよしタイム	本館泊

〈令和元年8月17日(土)〉

	7:00	9:10	15:45	17:00	19:30	20:20
二日目	朝食 つどい	森のみょうこう大冒険	自由 時間	入浴 夕食	夜のみょうこう大冒険	テント泊

〈令和元年8月18日(日)〉

	7:00	9:10	11:50	12:15
三日目	テント撤収 朝食	川のみょうこう大冒険	振り 返り	閉会式

3 体験活動の展開とポイント

幼児の「自立」と「協同」

今年度は幼児と保護者が分かれて活動する。活動の中で直面する「課題」に、自分の力で、また、友達と力を合わせて挑戦していく。「できた」という達成感、「できなかった」というくやしさを、活動から様々な思いを抱きながら、幼児の「自立心」「協同性」を高めていく。

[1日目(8/16) なかよしタイム]



Point
ゲームを通して、グループとしての一体感をもつ。グループのメンバーごとにお揃いのバンダナを身に付けて、さらに仲間意識アップ!

[2日目(8/17) 森のみょうこう大冒険]

①ゴールを目指して探検



Point
地図や課題解決ゲーム等のしかけが、幼児の自己決定や友達との合意形成を生み、自立と協同が促進される。

②課題解決ゲーム



③森遊び part 1



Point
様々な形の木を見て、「登りたい」「ぶら下がりたい」など、挑戦が始まる。

④野外炊事



Point
初体験のことが、自分でしたいという思いを強くした。

⑤森遊び part 2



Point
森遊びを時間と場所を変えて2回設定することで、1回目以上の挑戦が生まれる。

ゴール



Point
暗闇のトンネルをくぐる難易度の高い課題により、協力してクリアしようとする。

[3日目(8/18) 川のみょうこう大冒険]

①源流を歩く



Point
岩や倒木など、歩きづらい川をグループで挑戦することで、幼児同士の励まし合い、助け合いが生まれる。

②岩や倒木を越える



③滝を上る



Point
身長より高い滝を、自分の力だけで上ろうとする。

④トンネルくぐり



ゴール

4 調査結果・考察

[スタッフの振り返り]

キャンプ後に、自然の家職員、保育士、学生スタッフで振り返りを以下の視点で行った。

- ① 幼児の自立心の変化（自己決定の場面における変化、変化を促した場面）
- ② 幼児の協同性の変化（グループ内の幼児との関わりにおける変化、変化を促した場面）
- ③ 自然との関わりにおける変化

振り返りの中で、以下のような意見が出された。

「自立心」における変化

- ・大人によく助けを求めている幼児が、源流探険をすることで、「もう大丈夫」と大人の助けを必要としなくなった。
- ・保護者から離れようとしないうつ幼児が、森遊びでの木登りから大きく変化し、自然体験活動に夢中になった。

「協同性」における変化

- ・森の大冒険でのチェックポイントが、幼児のチーム意識を高めた。
- ・地図を見ることで、「1人で悩む→仲間に頼る→全員で決める」というステップアップができた。意見が異なるときも、幼児なりに折り合いをつけることができた。
- ・チーム意識が高まり、自己中心的な部分があった幼児が周りに対して「気を付けてね」と声をかけるようになった。
- ・自分の興味が中心で、グループでの活動が全くできなかった幼児が、友達と野菜を切ったり、火おこしたりすることで、その後、グループで活動することができた。

「自然との関わり」における変化

- ・虫嫌いな子が、グループ内の虫好きの子と関わることで、抵抗がなくなっていった。怖がっていたクモの巣が平気になった。
- ・はじめは自然体験活動に対する意欲が高まらない様子だった子が、木登りをすることで笑顔が増え、その後の活動は意欲的になった。

[保護者事後アンケート]

幼児キャンプ1か月後に、全参加者の保護者を対象にアンケートを実施した。10項目回答してもらうことで、幼児キャンプ後、幼児がどのように変化しているか回答してもらった。

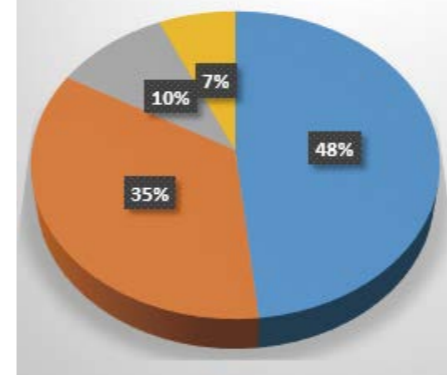
幼児キャンプ後アンケート

幼児キャンプに参加後、子供たちにどのような成長や変化があったかお答えください。

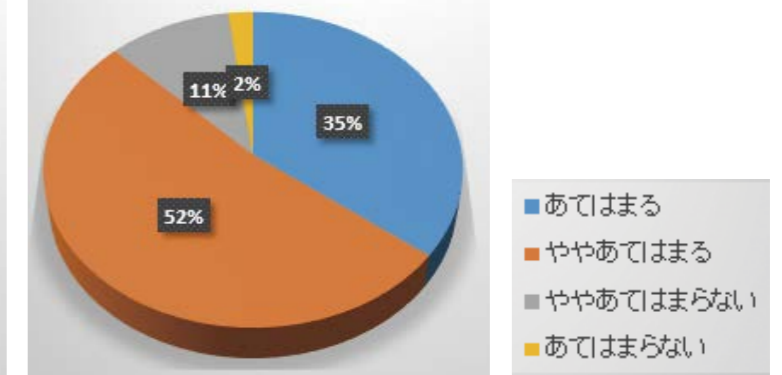
		4:あてはまる 3:ややあてはまる 2:ややあてはまらない 1:あてはまらない			
No.	項目	4	3	2	1
1	歯磨きや着替え等、生活の中で、1人でしようとするのがより増えた	4	3	2	1
2	様々な活動や遊びを最後までやり抜こうとするようになった	4	3	2	1
3	より自分の意見や思いを言うようになった	4	3	2	1
4	困ったときに、自分からお願ひするようになった	4	3	2	1
5	より友達や家族のことを考えて、行動するようになった	4	3	2	1
6	より友達や家族の意見を聞くようになった	4	3	2	1
7	よりお手伝いをするようになった	4	3	2	1
8	より友達や家族と仲良く行動するようになった	4	3	2	1
9	より虫や植物など、自然に対する興味をもつようになった	4	3	2	1
10	より外で遊ぶ回数が増えた	4	3	2	1

9月23日(月)までに高信用封筒にてご提出ください

「協同性」にかかわる回答



「自立心」にかかわる回答



- キャンプ後、朝の準備や家の手伝いを進んで行っている。
- 総合的には幼児キャンプを通して成長したと思う。
- 何度か友達とカレーを作る機会があったが、自信に満ち溢れた様子で包丁を握っていた。

(保護者のアンケートより抜粋)

○「自立心」・「協同性」において成長を感じている保護者が85%以上となっている。

[前年度との比較 ※保育士の聞き取りより]

[2018 幼児キャンプ参加保育士]

- 幼児が挑戦し、目的をもって取り組むことが子供たちの刺激となっていた。
- △幼児が頑張ろうとしている場面で、保護者が手を差し伸べてしまう場面が見られた。

[2019 幼児キャンプ参加保育士]

- 保護者がいないことで、幼児自身で解決しようとする場面が増えた。
- 親の前で見せないたくましい姿があったと、保護者との面談で分かった。

5 成果・課題

[自立心と協同性の向上]

○活動の中で自己決定や合意形成の場を経験することで、幼児の「自分でしょう」「友達しよう」という姿が随所に見られたことから、自立心と協同性の高まりが見られた。初日に親から離れることができなかった子が、自ら親から離れ、活動に向かう姿も見られた。

[幼児と保護者別の活動]

○幼児だけの活動により、幼児の自己決定・合意形成の場が多くなり、「自立心」と「協同性」の成長を促した。

[自然に対する関心の高まり]

○自然物に触れたり、捕まえたりするなどの姿が多く見られた。自然物への抵抗があった幼児が、活動の中で触ろうとしたり、遊んだりしようとする姿から、自然に対する関心への高まりが見られた。



[今後の幼児キャンプ]

- 幼稚園教育要領で示された『幼稚園教育において育みたい資質・能力と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基に、より教育効果の高い活動プログラムの構成を図る。』
- 幼児だけの宿泊も検討していく。

やんちゃキッズの大冒険 秋!!

1 事業の概要・目的

(1) 概要

幼児期におけるより多くの体験・経験が子供たちの成長に関係していることは、さまざまな調査で実証されている。当施設では年長児を対象に1泊2日の幼児キャンプを13年間、秋・冬に継続して実施してきた。今年度は初めて年中児を対象としたキャンプを行った。自分の力でできることが増えてくるこの時期に、親元を離れて過ごし、自分でできることをやってみることに気づき、それが自信に繋がるのではないかと考え本事業を実施した。

(2) 目的

○キャンプのテーマ

- ①自分のことは自分です
- ②お友達と仲良く遊ぶ

子供たちに約束として提示し、この2つのテーマを2日間意識して過ごした。そのため、スタッフには子供たちを見守るということを大切に、子供たち同士の関わりが深まるよう、言葉掛けや指示の仕方等支援の在り方について事前に共通理解を図った。特に生活体験（荷物の準備・片づけ、歯磨き、布団の準備等）は、キャンプ後の家庭生活で、自分で行うことが習慣となるように支援した。

(3) 対象

年中児 28名（男子14名、女子14名）
【6名×3班 5名×2班】



2 活動内容

(1) 事前保護者説明会【令和元年9月28日(土)】

日帰り	参加幼児	13:00	13:15 ~ 15:30
	参加幼児の保護者	はじまりの会 スタッフ紹介	グループで自由に遊ぶ 自己紹介・活動エリア確認・自然遊具で遊ぶ 事業について説明・質疑応答 (ねらい・日程・持ち物・保険・提出書類)

～事前保護者説明会での様子～

子供たちは、初めて会った仲間と緊張で親から離れられない子供も数名いた。また、こちらからの問いかけにも反応が薄かった。しかし、1時間という短い時間であったが、子供たちと班リーダーと一緒に遊ぶ中で徐々に笑顔も増えてきた。説明会の終わりに「何をして遊びましたか」という問いに、「虫を捕まえた」「外で遊んだ」と大きな声で教えてくれた。また「もっと遊びたかった」という子供の声が大半だった。保護者への説明も、年中児ということで心配事も多くあり、細かい質問まで受けることができ、保護者の不安を多少であるが解消することができた。



(2) キャンプ本番【令和元年10月12日(土)～13日(日)】

1日目			10:00	10:30	12:00	13:00	14:00	15:30	17:00	18:30	19:30	20:00
			はじまりの会	グループタイム	昼食	創作活動	探検ゲーム	調理体験	夕食	入浴	班タイム	就寝
2日目	6:30	7:10	7:30	8:30	9:00	12:00	13:00	13:30	※台風による影響で一部活動を変更			
	起床	朝の体操	朝食	部屋の片づけ	森の探検	昼食	班タイム	おわりの会				

3 体験活動の展開とポイント

- ①生活 ・「自分のことは自分でやる」リーダーは『待つ』という姿勢で臨む。
・着替え、片づけ、歯磨きなど生活習慣を繰り返す行う。
- ②食事 ・食堂を利用し、片づける、机を拭く等自分たちの使った物、場所をきれいにするなど自分で行う。
・自分たちで調理をする。包丁を使ったり、野菜をちぎったりして食事のお手伝いをする。
- ③活動 ・外での活動を主とし、子供たち同士で協力して解決するゲームや、森の探検など、自然を感じながら実施できる活動を取り入れる。また、自由時間では子供たちが一緒に遊べる時間を多く設けるようにし、遊びの発展を期待する。

～「できたねカード」を作成し、子供の「できた」を喜びに～

活動中に子供たちが「できた」ことを実感し、認められることでその後も意欲的に活動に取り組むことができるよう「できたねカード」を取り入れた。班タイムで子供たちにできたことを聞き、シールを貼った。

〈班タイム時の子供の様子〉

自分でできなかったことは「明日頑張る」と声を上げている子供もいた。



4 調査結果・考察

『活動中の子供の变化』※班リーダーの観察から

お母さんと離れる時、泣いて動くことができなかったR君。バスに乗って20分程泣き続けるが、『魔法の飴』を舐め、元気になる。1日目の夜には、楽しかったことをお母さんや、お兄ちゃんに自慢したいとワクワクしている様子であった。2日目の昼には『みんなと離れることが寂しい』と話していた。



R君にとって人との出会いが楽しさであり、それが彼の心情の変化をもたらしたものだのように感じる。また、R君の保護者からの事後アンケートで、色々なことに自信が付きキャンプ後に自転車に乗れるようになったという報告があった。



話すことが苦手なY君。保護者説明会時も親から離れることでせず、グループの輪に入ることができなかった。事前調査でも大人数の場が苦手であるという情報があった。1日目はなかなか話すことができず、夜の班タイムでも、お友達と話せなかったと自覚していた。2日目はグループの仲間とたくさん話をする場面が増え、班タイムでは、前日できなかった2つのことができたという自信をもって伝えていた。

Y君にとって仲間の存在が、彼を一步前進させた要因ではないかと考える。また、周りの状況や環境にも慣れ、話をするという目標を明確にしたことで取り組むことができたのではないかと考える。

『保護者の事前事後アンケート』

事前保護者説明会時と、事業終了後1か月後に、保護者に対して子供たちのキャンプ後の変容についてアンケートを実施した。アンケート項目は、「自立・生活」「協力・集団遊び」に関する内容で20項目の質問とし、「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの4段階評価とした。回答があった22名のデータをt検定にて算出した結果が以下の通りである。

【自立・生活】【協力・集団遊び】に関するキャンプ前後の変化

	キャンプ前		キャンプ後		t
	M (平均)	SD (標準偏差)	M	SD	
自立・生活	28.59	3.61	31.73	3.76	3.66 **
協力・集団遊び	32.95	5.28	34.55	5.84	1.04

** p < .01



「自立・生活」については、全体において1%水準で有意な向上が見られた。「協力・集団遊び」については、有意差は認められなかった。

【項目でキャンプ前後に大きく変化が表れたこと】

項目	キャンプ前		キャンプ後		t
	M	SD	M	SD	
元気な挨拶をかわすことができる【自立】	2.64	0.85	3.41	0.67	4.46 **
家の手伝いをする【生活】	2.73	0.63	3.27	0.63	3.81 *
親から離れていても不安にならない【自立】	2.59	0.85	3.41	0.67	4.83 **
友達が泣いたり困ったりしているときに、声をかけたり助けてあげたりすることができる【協力】	2.77	0.75	3.27	0.77	3.17 *

* p < .05 ** p < .01

「元気な挨拶をかわすことができる」「親から離れていても不安にならない」では、1%水準で、「家の手伝いをする」「友達が泣いたり困ったりしているときに、声をかけたり助けてあげたりすることができる」では5%水準で有意な向上が見られた。

『保護者からの自由記述より子供たちの具体的な姿』

自立心が芽生えたようで、チャレンジ精神が増えました。特に包丁を使ったことが大きな自信になっています。

「キャンプでできたもん」と自分で言い、自分のことは自分でやるという自覚が以前より強くなりました。

自立心

キャンプの約束は、家の合言葉になっていて、今でも自分から言葉を発して取り組んでいます。

今までは親からの声かけがあっただけでしたが、食事の片づけ、洗濯物の片づけは自分でやって毎日実施しています。



今まで親と離れるのが嫌がっていましたが、キャンプ後は、友達と過ごすことが楽しいようになり、離れても大丈夫になりました。

今までは恥ずかしがっていたが、初めて会うお友達と仲良く遊べるようになりました。

仲間との遊び

キャンプ前は言わなかったですが、お友達と一緒に遊びたい気持ちからか、自分から誘えるようになりました。

キャンプ後にあいさつが大きな声でできるようになり、お友達の中でも、積極的に声を出すようになりました。

5 成果・課題

(1) 成果

- 初めて年中児を対象にキャンプを実施した。2つのテーマ(目標)を掲げ、子供たちにも伝え取り組んだことで、「自分でやってみる」という意識が高くなったように感じた。「できたねカード」も効果があり、できたら褒められるということが嬉しく、自己肯定感に繋がっていたと考えられる。わかりやすく子供たちに伝えることが幼児キャンプに必要なということが改めて感じた。
- ボランティアリーダーが子供たちの変容を観察することで、子供たちの様子をしっかりと見ることができたという意見があった。子供たちを見る視点を示し、それに対してどのような支援をするのかを指導・助言することで、リーダーの育成に繋がった。



(2) 課題

- 今回台風による影響で計画の変更があり、保護者への連絡が遅れることがあった。様々な状況に対応できるように準備をしておく必要がある。保護者説明会時に、自然の状況に応じた対応について話しておくことで、保護者の安心に繋がると思われる。



海の声キャンプ

1 事業の概要・目的

(1) 概要

国立若狭湾青少年自然の家では、親子を対象とした年間3回の事業の1つとして「海の声キャンプ」を8月に実施している。当施設の事業は、親と子が一緒になっての活動が多い。親子と一緒に活動すると、特に親は子供の存在を意識し安全に配慮しながらの活動になり、自然を満喫できないのではないかと考えた。そこで、今回の「海の声キャンプ」では、同じ敷地で活動はするが、親と子が別々の自然体験活動をする内容を取り入れている。

1日目は、親はシーカヤックを行い、子供を気にせず自然体験を楽しむ。子供は、水泳活動、磯遊び、磯観察などの体験を行う。2日目は、家族にアンケートを取り、親と子が一緒にできる海体験を選択する内容である。

自然を楽しんで満喫してもらえるように、時間に余裕をもって活動に取り組めるようにした。

(2) 目的

- ・安全に、海活動を行えるように環境を整え、自主的に活動を行うことで自然体験活動への意欲を高める機会とする。
- ・海の体験活動を通して、子供が異年齢と交わって遊ぶことで、他者を理解し、友達の姿を見て学び、子供の成長を促す機会とする。
- ・様々なことに挑戦することで、子供自身が自分の力を伸ばしたり、頑張る力を高められる場とする。

(3) 対象

4歳児（年中）～小学校2年生までの子供とその保護者
参加人数 13組 38名（子供20名 保護者18名）

2 活動内容

令和元年8月31日（土）

一日目	11:00	11:30	13:30	14:00	16:30	17:00	19:00	21:00
受付	オリエンテーション	昼食	はじまりのついで	子供 水泳活動・磯遊び・磯観察 保護者 シーカヤック	テント設置	夕食・入浴	自由時間 キャンプ ファイヤー	就寝

令和元年9月1日（日）

二日目	6:00	7:00	7:30	9:00	11:00	12:00
起床	洗面・荷物の整理	朝のついで	野外炊事 (カートンドック)	親子共同活動 シーカヤック 水泳活動 磯遊び・磯観察	おわりのついで	※希望者：昼食 解散



3 体験活動の展開とポイント

当施設は、若狭湾に面しており自然豊かな環境の下で、水泳活動、シーカヤック、スノーケリング、磯観察、磯釣りなどの海活動が体験できるが、今回は、小さい子供でも楽しめる活動を選択した。

子供の変化を見るために、保護者に活動の事前と事後にアンケートを取り、活動中は、スタッフが子供の様子を観察し、変化の見取りを記録した。

(1) 安全・安心に海活動ができるために

- ・事前にスタッフやボランティアがどの子供の変化を記録するかを決めて、子供の活動を見守るようにする。
- ・海が苦手な子でも、安心できるようにライフジャケットを着用する。また、親も一緒になってライフジャケットの扱い方を聞いてもらうことで、今後の親子での活動に生かしてもらう。



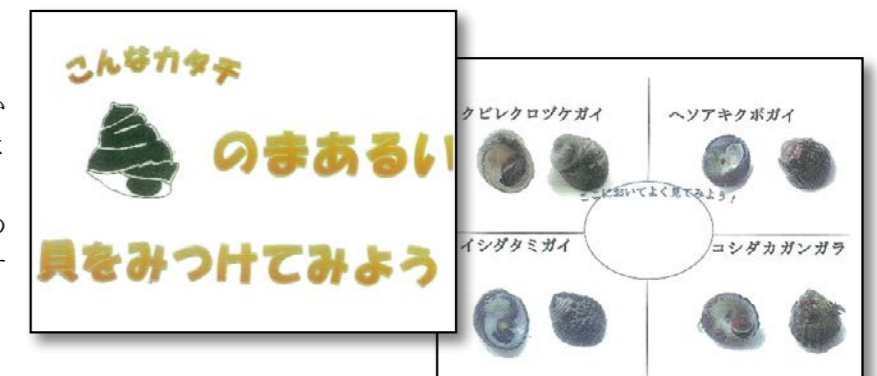
(2) 水泳活動として

- ・波際で砂遊びをしたり、箱めがねを使って浅い海の中にいる生き物を見たりして、少しずつ海に慣れながら、自然と水泳ができたという達成感を感じてもらおう。
- ・飛び込み台を使って、海に飛び込むことを取り入れることで、チャレンジする気持ちを高め、達成感を感じてもらおう。



(3) 生き物観察として

- ・海辺や磯で、魚や貝など見つけやすいように箱めがねを使って観察できるようにする。
- ・海の生き物に興味を持つように、海の生き物観察シートを見ながら活動する。



(4) 海活動全体として

- ・自然体験活動を通して子供同士のつながりを深め、協調性や自己抑制を持たせるようにする。
- ・2日目の親子一緒にの海活動は、当日の朝に水泳、磯観察、シーカヤックから選択してもらい、1日目に親や子供が体験したことをお互いが知り、親子が共感できる時間とする。



4 調査結果・考察

親子が離れて海活動を体験することが子供の「学びに向かう力」にどう影響・反映されるのかを調査することとした。

(1) 子供の変化を確認するために

本事業に参加した子供 20 名を対象に、事業前と事業後の変化についてアンケートを実施した。質問項目は、「学びに向かう力」の 5 因子より、「好奇心」、「協調性」、「自己主張」から 2 つずつ、「自己抑制」、「がんばる力」から 3 つずつ、計 12 個の設問として実施した。また、活動中の様子をスタッフが見取り、子供の変化を記録した。

(2) 分析結果の詳細

右図のアンケート結果から、それぞれの項目で向上が見られた。特に、「好奇心」「がんばる力」について、5%水準で有意な向上が見られた。

子供 20 人	事前調査		事後調査		t
	M	S D	M	S D	
好奇心	3.30	0.58	3.50	0.55	2.37 *
協調性	3.02	0.80	3.22	0.83	1.90
自己主張	3.05	0.61	3.20	0.57	1.55
自己抑制	2.93	0.78	2.96	0.86	0.32
がんばる力	2.73	0.44	2.93	0.77	2.56 *

* P < .05

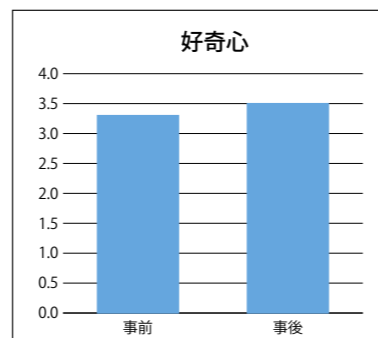
「好奇心」に関する見取りや感想

子供の見取り

保護者の感想

たくさんの海の生き物に興味を持ち、疑問に思ったことをスタッフに質問する姿が見られた。

いろいろな海の生き物を探していた。自分からスタッフに海の生き物を見せて、楽しそうに話しかけてくれた。



貝を集め、箱めがねに入れていた。また、岩と岩との間に手を入れとっていた。

楽しそうに生き物を探していた。

ヒトデやたくさんの生き物を見つけて楽しそうに遊んでいた。

砂場で遊んだり、波で遊んだり、とても元気いっぱい楽しそうな様子だった。

海の生き物が苦手だったが、ずっと浅瀬にいた。そこで、貝殻や石集めをして楽しんでいた。

箱めがねを使って、すごく楽しんで魚などをずっと探していた。

磯遊びした子供は、魚やヒトデ、ウニを見たとき楽しそうに話していました。

水泳活動では、深いところまでいき、楽しく遊んでいた。

海の中で不安に感じながらも、みんなと一緒に遊ぶ様子がみられた。カニやウニを触ることができなかったが、興味を示していた。

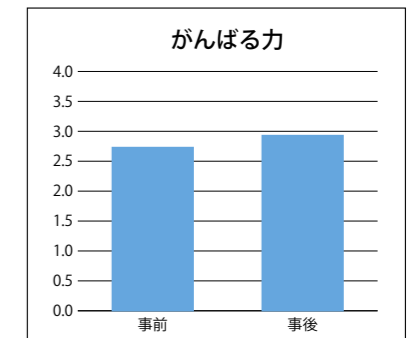
家に帰ってから、海の生き物図鑑から若狭湾で見た生き物を見つけていた。

「好奇心」の項目では、普段あまり目にすることがない海の生き物を間近に見たり、触ったりしたことで、海の生き物への興味感心がわき、体験後の数値に表れてきたと考えられる。

「がんばる力」に関する見取りや感想

水泳活動では、飛び込み台まで行き、何回も飛び込みにチャレンジをしていた。

磯観察では、ウニやヒトデを見つけて楽しんでいた。カニもつかめるようになった。



水泳活動では、足のつかない深いところも全く怖がっていなかった。自分で深いところへ行きたいと言っていた。

水泳活動もスタッフの手を借りながら、深いところも怖がらずに行っていた。手を放しても楽しそうに遊んでいた。

スタッフと手を繋いで海に入ると、足がつかないところでも泳いでいた。

水泳活動では、一人で飛び込み台に行くのは怖がっていたが、スタッフと一緒にいくと楽しんで遊んでいた。

1日目の活動では、親が近くにいないことが気にならないほど夢中で海遊びをしてよかった。

最初は、飛び込み台から飛び込むことに少し怖がっていた。一度できるようになると楽しかったようで何度も飛び込んでいた。

「お父さんとお母さんと離れて活動するよ」と話した時は、子供は、不安そうにしている姿を見て安心しました。

1日目、親と離れて子供が号泣していましたが、磯遊びの時に笑顔が見られてよかった。スタッフの方にいつの間にか懐いて遊んでもらってとてもありがたかった。

「がんばる力」の項目では、安心して水泳活動や磯遊び、磯観察を体験できたことが、足がつかない海でも飛び込み台に行こうとする気持ちや海の生き物を触ってみようと頑張ろうという気持ちが出てきたと考えられる。



5 成果・課題

(1) 成果

事前・事後のアンケートの結果から、安全・安心に海活動を行える環境を整えたことで、子供が「飛び込み台まで行きたい」「飛び込んでみたい」「海の生き物を触ってみたい、捕まえてみたい」というチャレンジする気持ちが生まれてきたと考えられる。このことから、親子別々の活動でも、安全・安心な環境を整えれば、子供の「学びに向かう力」のうち、「好奇心」「がんばる力」により影響があると考えられる。



(2) 課題

今回、体験中に親に子供の様子を伝えることができなかった。例えば、子供達の活動の様子、変容などを動画で記録し、保護者に見てもらうことで、自然体験が子供の変容に及ぼす効果などを実感してもらうことができ、理解も深まったのではないかと考えられる。

国立青少年教育施設中部・北陸ブロック次長プロジェクト

令和元年度 調査研究事業

「幼児期における自然体験活動の展開と効果に関する研究」



事業を終えて

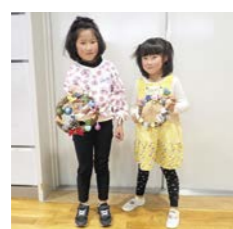
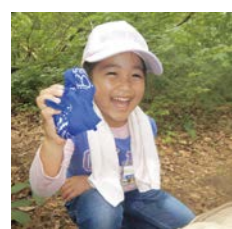
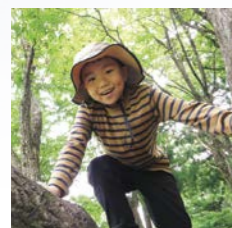
私たち中部・北陸ブロックの5つの国立青少年教育施設は、青少年に質の高い体験活動の機会を提供し、自立した意欲あふれる青少年を育成することを願い、各施設がそれぞれの立地条件や特色を生かした事業に日々取り組んでいます。

本プログラムの研究テーマは、「幼児期における自然体験活動の展開と効果に関する研究」として本年度が2年目の取組となります。幼児たちが豊かな自然環境の中で、仲間たちと一緒に、様々な体験活動を行うことは大きな意義があります。そして自然の中では、流れる沢水の冷たさや木々の匂い、冬はたくさん積もった雪の柔らかさなど、ホンモノの自然と触れることで子供たちの感性が育まれます。幼児期の体験はその人の生涯の基礎となるのではないのでしょうか。

中部・北陸ブロックの各施設は、海や山、森など、多様なフィールドでの幼児対象の自然体験活動をたくさん展開しています。その成果が今後、全国各地の実践に活用され、新たなプログラム開発、そして更なる幼児の体験活動が推進され、すべての青少年の自立の一助になることを心より願っております。

最後に、本プロジェクトの事業運営や評価、研究手法のアドバイスなど、継続的に親身にご指導を頂きました信州大学理事兼副学長 平野 吉直先生、筑波大学人間総合科学研究科教授 坂本 昭裕先生、信州大学教育学部講師 瀧 直也先生に心より感謝を申し上げます。

令和2年3月
独立行政法人国立青少年教育振興機構
中部・北陸ブロック次長プロジェクト事務局
国立妙高青少年自然の家 次長 森原 強史



目的

幼児期における自然体験活動の効果的なプログラムや事業運営、子供たちとの関わり方指導演など、幼児期にふさわしい自然体験活動プログラムのあり方について検証する。

さらに、その成果を全国の公立青少年教育施設及び国民に広く発信・普及する。

得ようとする成果

<求める成果>

- 幼児を対象とした体験活動プログラムや幼小接続を考えたプログラムの展開
- 量的・質的效果検証方法を活用して、幼児期における効果的な自然体験活動プログラム開発

成果の普及・活用

本研究により検証した幼児期における自然体験活動の実際や子供の変容を報告書にまとめ、独立行政法人国立青少年教育振興機構 中部・北陸ブロック5施設の教育事業並びに研修支援に生かすとともに、全国の国立青少年教育施設及び青少年に関係した機関が活用できる幼児期の体験活動について、プログラムや手法について具体的に示し成果の普及と活用を図る。

研究機関

国立青少年教育施設中部・北陸ブロック次長プロジェクト
国立能登青少年交流の家・国立乗鞍青少年交流の家
国立妙高青少年自然の家・国立立山青少年自然の家
国立若狭湾青少年自然の家

研究期間

平成31年4月1日～令和2年3月31日

本調査研究事業の背景

(1) 国立青少年教育施設が実施する必要性

平成30年度からの幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（いずれも平成29年3月31日公示）の改訂（定）に伴い、幼児教育・保育において育みたい「資質・能力」の3つの柱と、幼児期の終わりまでに育ってほしい「10の姿」が示された。全年齢期の体験活動を標榜する当機構においては幼児期の体験活動の重要性に着目し、自然環境の特性を活かしたプログラム展開を実施している。今まで既に様々な場所で実践されている幼児の自然体験活動において、より効果的なプログラムと展開につながるよう成果をまとめプログラムや事業を実施し、広く成果を普及することは国の施策を具体化するナショナルセンターとして大切な役割の一つである。

(2) 長期的な計画と今年度の位置づけ

過去10年にわたり積み上げてきた成果の上に、平成30年度からの3年間は、教育要領・指針等を踏まえ幼児期における効果的な体験活動のプログラム展開や効果に関して検証をし

ていく。今年度は各施設が実施した事業を量的・質的に検証を行い、次年度事業へとつなげていく。

指導者

信州大学 理事・副学長	平野 吉直 先生
筑波大学 教授	坂本 昭裕 先生
信州大学 講師	瀧 直也 先生

担当者

国立能登青少年交流の家	
次長	田 中 利 弘
主任企画指導専門職	釜 谷 剛
国立乗鞍青少年交流の家	
次長	室 井 修 一
企画指導専門職	井 川 拓 哉
国立妙高青少年自然の家	
次長	森 原 強 史
事業推進専門職	齋 藤 晃
国立立山青少年自然の家	
次長	岩 間 一 成
事業推進係長	小 泉 滋
企画指導専門職	松 井 功 一
国立若狭湾青少年自然の家	
次長	秋 山 洋 浩
企画指導専門職	伊 藤 陸 浩

調査研究の計画

- 第1回企画会議・研修会
(研究テーマ・研究計画の検討)
会場：国立妙高青少年自然の家 6月10日～11日
○調査研究事業の計画検討
○「幼児対象事業に関する講義・事例検討」
講師：信州大学教育学部 講師 瀧 直也 先生
○「幼児対象事業に関する評価方法」
講師：筑波大学人間総合科学研究科 教授 坂本 昭裕 先生
- 第2回企画会議・研修会(対象事業の報告)
会場：国立若狭湾青少年自然の家 10月8日～9日
○各施設で実施した事業の概要と成果の報告
○事業成果のまとめ方についての検討
- 第3回企画会議・研修会(報告書の検討)
会場：国立能登青少年交流の家 12月5日～6日
○各施設で開発したプログラムの成果と課題の確認
○報告書の推敲と校正
- 第4回企画会議・研修会
(成果と課題の確認・次年度の計画)
会場：国立立山青少年自然の家 2月4日～5日
○報告書の最終校正
○令和2年度の事業企画及び全体計画の検討

令和元年度調査研究事業 幼児期における自然体験活動の展開と効果に関する研究

■発行者/中部北陸ブロック次長プロジェクト

国立能登青少年交流の家・国立乗鞍青少年交流の家・国立妙高青少年自然の家・

国立立山青少年自然の家・国立若狭湾青少年自然の家

■発行日/令和2年3月 ■印刷所/(株)第一印刷所



国立能登青少年交流の家

〒925-8530 石川県羽咋市柴垣町14-5-6
TEL.0767-22-3121 <https://noto.niye.go.jp/>

能登半島の入口にあたる羽咋（はくい）市の、日本海を間近に臨み豊かな自然環境を持つ眉丈台地に位置する国立能登青少年交流の家は、青少年のステップアップ支援事業や里海、里山を活用した多彩な体験活動プログラムを提供しています。



国立乗鞍青少年交流の家

〒506-0815 岐阜県高山市岩井町913-13
TEL.0577-31-1011 <https://norikura.niye.go.jp/>

乗鞍岳（3,026m）の中腹、白樺林に囲まれた広大な飛騨乗鞍高原に位置する国立乗鞍青少年交流の家は、登山やスキー、高地トレーニングなど、標高1,510mを舞台とした自然体験活動や、青少年の社会性・コミュニケーション能力を育むプログラムの提供を行っています。



国立妙高青少年自然の家

〒949-2235 新潟県妙高市大字関山6323-2
TEL.0255-82-4321 <https://myoko.niye.go.jp/>

妙高戸隠連山国立公園内の妙高山の山麓に位置する国立妙高青少年自然の家は、年間約13万人の利用者に大自然の中で質の高い人間関係能力を高めるプログラムや環境教育に対応したプログラムの提供を行っています。



国立立山青少年自然の家

〒930-1407 富山県中新川郡立山町芦峯寺字前谷1
TEL.076-481-1321 <https://tateyama.niye.go.jp/>

立山連峰のふもと、不動平の丘陵地に位置する国立立山青少年自然の家は、より低年齢からの自然体験をモットーに、少年リーダー育成事業や小学校低学年・幼児を対象としたキャンプ事業、登山・星座学習といった研修支援プログラムの提供などを行っています。



国立若狭湾青少年自然の家

〒917-0198 福井県小浜市田島区大浜
TEL.0770-54-3100 <https://wakasawan.niye.go.jp/>

若狭湾国定公園の中央にある田島半島の一画に位置する国立若狭湾青少年自然の家は、リアス式海岸特有の美しさが目の前に広がる専用ビーチを有し、そこでスノーケリングやカッターなどの海洋活動ができます。ここから漁村の人々との触れ合い、世界の国々へと海の道が続いています。



National Institution For Youth Education

独立行政法人 国立青少年教育振興機構

■中部・北陸ブロック

国立能登青少年交流の家・国立乗鞍青少年交流の家・国立妙高青少年自然の家
国立立山青少年自然の家・国立若狭湾青少年自然の家